

名勝小金井桜 復活の光と影

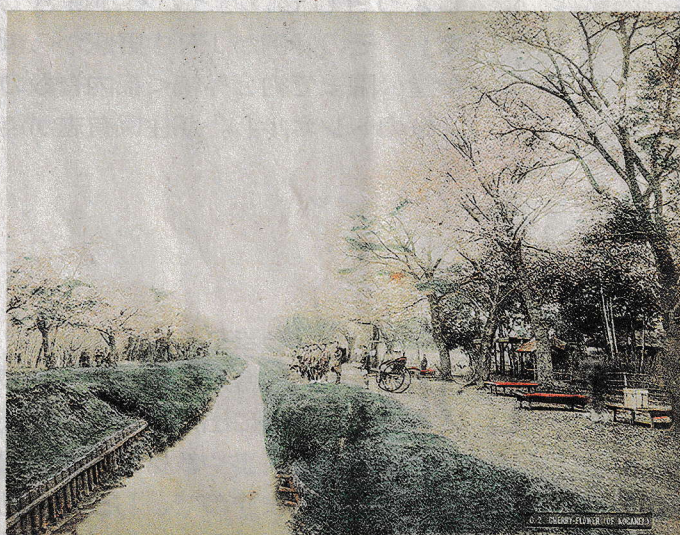
▶▶上

昭和の風景 もう一度

玉川上水に沿ったヤマザクラ並木「名勝小金井桜」を、かつて関東一と称された姿に復活させようという計画を、十年前から小金井市域を中心に都と同市などが進めている。上水を管理する都水道局が一部区間で土手に生えた樹木を「皆伐」したため、環境保護団体は「生物多様性の時代に逆行する」と反対。計画は現在中断している。推進派と反対派に歩み寄る余地はあるのか。(この連載は花井勝規、林朋実が担当します)



①玉川上水堤のサクラ並木はヤマザクラのため、ソメイヨシノより開花が遅い＝小金井市で(3月31日撮影)
②明治30年ごろ撮影された「小金井橋の景」。手彩色されている＝小金井市提供



玉川上水 江戸初期の1653年、江戸市中に多摩川の水を供給するため建設された導水路。羽村取水口(羽村市)から四谷大木戸(新宿区)までの全長約43キロ。現在も現役の水道施設として稼働する上流部(小平監視所まで)より下流は1965年から送水を停止していたが、86年の清流復活事業で下水の高度処理水を利用した水の流れが復活した。

「雑木がうつそうと生いのは、上水の土手で家族が茂っていた土手がきれいに花見を楽しんだ昭和三十年代。下草も生えてきた。これが小金井桜と玉川上水の本来の風景です」

桜の保全に取り組む市民団体「名勝小金井桜の会」の小沼広和会長(左)が、小金井橋を中心に上水の両

岸に植えたのが始まり。吉野山(奈良県)など各地のヤマザクラを取り寄せた。浮世絵にも描かれ、江戸近郊で一番のサクラの名所になった。一九二四(大正十三年)年には、現在の小平市の小川水衛所から、小金井市、西東京市を経て、武蔵野市の境橋までの六キロが国の名勝に指定された。

環境が変わったのは六五年だ。淀橋浄水場(新宿区)が廃止され、上水の水が止まった。上水管理の停滞で荒廃が進み、雑木が繁茂していった。

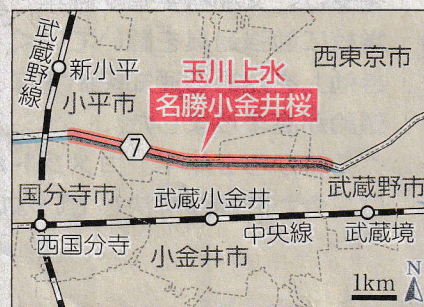
これに先立って五四年には都立小金井公園が開園した。現在千七百本のサクラを誇る同園が、都内有数のサクラの名所に取って代わった。

小沼さんは二十五年ほど前、小金井市職員として小金井桜をテーマにした市民講座を企画したことをきっかけに保全活動に関わるようになった。当初は「負担を嫌がる空気が市内にあった」と振り返る。サクラの保護には手間がかかるからだ。市民から「寝た子を起

こすな」と陰口をたたかれたこともあった。

二〇〇三年、玉川上水が江戸、東京の発展を支えてきた歴史的価値を有する土木施設・遺構として国の史跡に指定され、追い風が吹いた。史跡整備の一環で小金井桜の再生計画が具体化した。名勝指定当時は約千四百本あったヤマザクラは一年には七百八十六本まで減少。補植などの努力が続けているが、現在も九百十三本にとどまる。

小金井市の西岡真一郎市長は「小金井桜は二百八十年にわたり継承されてきた貴重な国の財産だ。管理が行き届かず、枯死の危機にあるサクラの保全は私たちの使命だ」と力を込める。



名勝小金井桜 復活の光と影

▶▶中

「保護名目の自然破壊」

「この惨状を見てください。ひどすぎる。サクラ保護の名を借りた自然破壊だ」。小平市などで幅広く活動する市民団体「玉川上水みどり」といきもの会議の高槻成紀代表は、小金井市を流れる玉川上水の関野橋から梶野橋の変わりわてた土手の様子を指さし、語気を強めた。

土手の樹木はすべて根元から伐採され、切り株だけを残す「皆伐」状態になった。高槻さんは「生物多様性の時代に逆行する。サクラを優先して緑を切るのは時代錯誤の懐古趣味だ」と伐採を続ける都水道局や小金井桜復活の旗を振る小金井市を批判する。「ヤマザクラは山に咲く野生品種で他の樹木とともに群落を形成する。サクラを優先するのは良いにしても、その脇にカエデやコブシがあっても問題はないのに」。

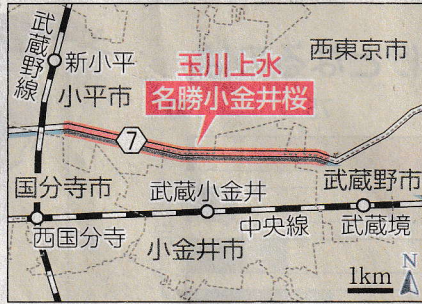
都水道局は二〇〇九年に史跡玉川上水整備活用計画を策定。翌年度から一九年度までの十九年計画で主に



小金井市内の小金井橋から梶野橋までの約二キロで整備を進めてきた。計画では、倒木やのり面の崩壊を招く



①玉川上水堤の雑木が「皆伐」され土手に残った無数の切り株 ②3月24日、小金井市の関野橋下流で伐採以前の玉川上水の様子。ケヤキなどが生い茂り「緑陰」を作っていた ③2019年7月、小金井橋下流付近で(加藤嘉六さん撮影)



を守る会」(略称・こだま)のメンバーで森林インストラクターの大石征夫さん(モモ)は「伐採する前に住

民が立ち会って『このイロハモミジは残して』と要望リストを提出したのに、結果的にほぼすべて伐採された。地元住民の意向を無視する行政のやり方はおかしい」と憤慨する。

こだまが一九年八月、整備区間約二キロの十四カ所で地表面の温度を比べたところ、伐採される前の緑が残された場所で一歩低い温度が約三二度だったのに対し、皆伐エリアの最大値は六七度超。その差は最大三

五・六度もあった。

こだまの元代表で、カメラマンの加藤嘉六さん(モモ)はそんな玉川上水の「緑陰」の効果を説く。「上水に残された樹木は都市化が進んだ東京では希少なグリーンベルト(緑の回廊)だ。地球温暖化対策の観点からも緑の破壊をこれ以上進めないでほしい」と願う。

こうした批判に対し、日本自然保護協会理事長で、小金井市の玉川上水・小金井桜整備活用推進委員長を務める亀山章東京農工大名誉教授は「冷静に考えてほしい」と促す。「ケヤキなど雑木が繁茂した状況を放置すれば玉川上水ののり面の崩壊につながる。上水は江戸が栄えた命の根源で、歴史的に大きな価値がある」と反論する。

小金井桜の保全について

は「ケヤキは年間二倍伸びるのにサクラは一割に満たない。成長速度が違いすぎる。徹底的にケヤキを伐採しないかぎり、保全はうまくいかない」との立場だ。

名勝小金井桜

復活の光と影

▶▶下

宙に浮く西への延伸

名勝小金井桜の復活計画は約十年がかりで、小金井市内の小金井橋から梶野橋まで約二キロの整備がほぼ完了した。いよいよ次の段階へ進もうとしていた昨年七月、小平市が慎重姿勢に転じ、事業は中断したままになっている。

次は、名勝の全長六キロのうち小金井橋から西側の茜屋橋までの約一キロの区間を五、六年で整備する計画。この区間は市境が玉川上水の上であり、北側は小平、南側は小金井市域のため、玉川上水を管理する都水道局、サクラを管理する都教育庁と両市の四者が事業の進め方を話し合ってきた。

小平市の小林正則前市長は昨年六月、玉川上水やサクラの保護について「生物多様性の維持」や「地元への配慮」を求める都知事宛ての要望書を提出した。同市内の複数の環境保護グループが小金井市内の樹木の伐採状況に危機感を抱き、

大正時代、旧東京市が名勝指定を記念して小金井橋脇に建てた標柱。背後にヤブが迫っており、小金井桜の現況を象徴している。小平市で



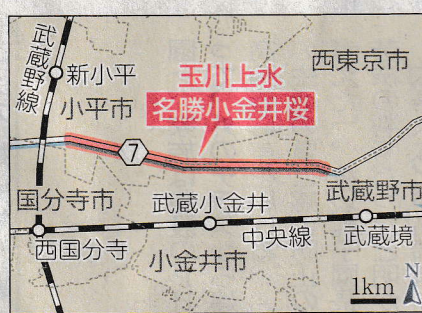
市や都に対する陳情活動を活発化させていたからだ。

環境保護団体などから樹木の伐採で批判の矢面に立つてきた都水道局の担当者は「小金井市域での伐採は地元の意向に沿った」と打ち明ける。小金井橋以西の計画は「小平市の協力がないうちの小平市域は約二キロだが「名勝の『小金井』の地名がネックになって小平市は以前から乗り気ではなかった」と担当者はいふ。

小平市内の小金井桜は二百七十八本あり、多くが高齢木だ。復活計画の中断で枯死を心配する声が出ており、小金井市役所の内部には「南側の小金井市域だけでも事業を進めるべきだ」との強行論もくすぶる。

だが、西岡真一郎市長はこれを「考えていない」と否定する。小平、小金井、西東京、武蔵野の名勝エリア四市による計画推進を目指す立場から「保全できる

樹木は残してほしいという住民の声と上水ののり面やサクラの保護とのバランス



を大事にしたい」と打開策を探る姿勢をみせる。

小平市内のある環境保護団体幹部は「『一本も木を切るな』というグループと皆伐を進めた両極の勢力が対立し、政治問題化している印象だ」と指摘。「適度に緑の保全をしながらサクラ保護はできるはずだ。互いに歩み寄り、共存の道を探るべきだ」と語った。(この連載は花井勝規、林朋実が担当しました)



小金井市で造園業を営む杉山利男さんが育てているヤマザクラの苗。玉川上水堤に移植するまで6年かかるという